The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	狭間を生きる若者たちのライフストーリー
Author(s)	原, めぐみ
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59510
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　原　めぐみ　　）	
論文題名	狭間を生きる若者たちのライフストーリー

論文内容の要旨

本論文『狭間を生きる若者たちのライフストーリー』は、若者たちが人生の危機や混沌についていかに語り、自己を生成するのかを理解するための研究である。本論文は、近年の日本とフィリピンの移動現象の中で生まれた「JFC」と呼ばれる人びとのライフストーリーを記述する。なお、呼称のもつ限定的な時間性と場所性を理解した上で、支援団体やそれら団体で活動する若者たちが使うイディオムとして「JFC」という呼称を用いた。調査協力者の語りから、かれらが、人種／エスニシティ、国民国家、地理的な場所などの「狭間」に位置していることに注目した。そして人類学者ティム・インゴルドが提示した「探索（wayfaring）」という鍵概念から発想を得て、若者たちの自己生成の語りを解釈していく。探索とは、人びとの人生における線上の移動のことである。人生における様々な出来事は、人生という旅路の途中に立ち現れる。本論文では、調査協力者の途上の経験や他者との流動的な関係性、そして狭間を生きる主体性を捉えた。

移民・移住研究における理論的課題として、二点提示する。一つ目に人種／エスニシティや世代といった分類の尺度が多用され、本来の多声的な語りが分断されていることだ。世代やエスニシティによって区切られたカテゴリー、例えば「日系人」や「在日フィリピン人」、「移民2世」や「第1.5世代」などである。二つ目に、移民は出身国から受入国へ移動するという一方向的な移動が自明視されてきた点である。これは移住・移民研究が、国民国家の空間と時間の枠組みを前提としていることを意味する。このような課題に取り組むため、本論文では、調査協力者の語りを分断して分析するのではなく、かれらのライフストーリーから学ぶことを試みた。

方法論として、2008年から2015年までの複数地フィールドワーク調査、その間に行った87名の若者たちとの継続的インタビュー調査をもとにライフストーリーを再構築した。また、研究過程において、研究協力者である若者たちと向き合った筆者自身の迷いや揺れについても反省的に記述した。

本論文の構成は次のようになる。まず序論で研究の背景と目的について言及する。第1章で分析的・理論的枠組み、第2章で方法論について説明する。本論文の独自性は、在日フィリピン人研究の中で議論されてこなかった子どもや若者に焦点を当てたこと、複数地フィールドワークにより一方向的な移動ではなく、日本とフィリピンを往来する若者たちを追跡調査してきたことが挙げられる。

第3章と第4章では、人びとを人種／エスニシティで分類化することが招く断絶を明らかにし、他者かのら「名づけの暴力性」について言及した。まず、日本人とフィリピン人を両親にもつ子どもの呼称が、1980年代以降、変化し続けていることに着眼し、呼称の変化を取り巻く社会環境の変化をメディア表象と支援団体の運動言説をもとに分析した。支援団体が構築してきたモデル・ストーリーに共感し、「JFC」として物語ることを内面化する語りが聞かれる中、支援団体の言説に抵抗する若者たちの多声性も確認できた。こうして次第に支援団体に属する同じカテゴリーの者としての集団性が弱まり、若者自らが当事者団体設立を目指すようになる。「JFC」と呼ばれる人びとでも、人生の経路は一人ひとり異なるため、一時的に支援団体に属し、モデル・ストーリーに共鳴したとしても、同じ

場所に留まり続けるわけではないことを確認した。

次に第5章と6章では、「JFC」の若者たちを国境によって分断する国籍とそれを定める国籍法制度について説明し、研究協力者らはこうした制度の壁にいかに対応しているのかをライフストーリーから解釈した。2000年以降、「JFC」を原告とした国籍確認訴訟事件を題材に、国籍法という制度の壁がいかに「JFC」にとって障害となっているのかを検討した。「JFC」の若者たちに日本国籍とフィリピン国籍の二者択一を迫り、国籍によって人々の境界を明確化しようとする国籍法は、若者たちの狭間性を許容しない。しかしながら、実際には、若者たちは柔軟性に欠くはずの法律の網目を潜り、日本国籍を取得し、フィリピンでもそれを有効活用している若者が少なくなかった。こうした若者たちの実践からは、国民国家の狭間に立っていることを活かした生き方が語られた。一方で国家に対し、自らの政治的アイデンティティの所在を問いかけ、他方では国籍という概念そのものを揺らがすような実践を行っている。

続く第7章、第8章では、改正国籍法施行を機に来日した若者たちのライフストーリーを取り上げる。まず、来日に伴い若者たちが直面する「構造的暴力」を分析し、次に代表的な二人のライフストーリーから、こうした構造的な困難をどのように経験したかを記述した。多くの場合、移住プロセスには、渡航支援や就労斡旋を担うブローカーの介在が不可欠となるため、ここで立ち現れる構造的暴力は、職業選択肢のなさや低賃金であるだけでなく、債務を背負うなどの搾取である。「JFC」を取り巻く移動の制度論は、人身取引のそれと類似する。しかし、若者たちの自主的な移動であるがゆえ、問題が公に出にくく、周縁化され社会的に脆弱な立場に置かれているのである。それでもなお、若者たちは、危機や困難の解決や回避に主体的に関わる。二人のライフストーリーからは、構造的暴力に苛まれながらも、ブローカーから逃亡したり、逆に利用したりするという行為者性が見られた。また、同胞ネットワークに加わったり、家族との関係を強化したりしながら、行為者としてのアドホックな生き方を模索している。かれらにとって移動することは断絶の経験ではなく、切れ目のない人生の探索である。

本論文は、若者たちの人生の歩みを粒さに紡ぎ出すことにより、かれらの人生に関わる構造的条件と若者たちの主体の位置を解釈する描写した。ライフストーリーという筆者と研究協力者との共同作業により、絶えず動き続ける若者たちの人生を記述した。同時に若者たちのライフストーリーは、能動的に生き続けることがいかに困難であるかを教えている。若者たちの越境物語は、探索者の永続的な物語を調査者が研究のために途中で区切り、断面的に分析することの危うさを示している。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　原めぐみ　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	宮原曉
	副 査	教授	千葉泉
	副 査	講師	島薗洋介

論文審査の結果の要旨

原めぐみ氏の博士論文は、「JFC」（Japanese Filipino Childoren）と呼ばれる若者たちが「JFC」にまつわるモデル・ストーリーに共鳴したり、逆にそうしたストーリーから逃れたりしながら、国家と国家、ストーリーとストーリー、さらには自己と他者の「狭間性」（in-betweenness）に自らの未完の物語を発見していく過程を丹念な民族誌的記述を通して明らかにした独創的な研究である。

本論文の前半では、まず「JFC」をめぐる名づけと名のりの問題と日本国籍取得をめぐる構造的暴力の問題に焦点があてられる。しかし、８年間、合計87名の「JFC」、及び元「JFC」を対象とする綿密なフィールドワークにもとづく民族誌的記述では、単にカテゴリー間の相克や日本国籍取得の難しさにおける「JFC」の戸惑い（傷つきやすさ）や戦略（したたかさ）にとどまらず、人生という旅路を歩む「探索者」（wayfarer）としての「JFC」の姿が浮き彫りになる。このため「JFC」のカテゴリーも、「日系人」や「在日フィリピン人」「２世」「１．５世」などといった従来の分類ではくくれない。この点、「JFC」をどのような呼称で呼ぶのか、「JFC」自身の加齢とそれに伴う自称の変化をどう記述に織り込んでいくかといった原氏自身の迷いと苦労の痕跡が論文には滲み出ている。「JFC」の定義は、さしあたり日本人とフィリピン人の狭間に自己をとらえようとする若者、ということになるが、狭間性は日本人、フィリピン人といった国籍の問題に限定されないのである。

これらの議論を踏まえて、本論文の後半では、「JFC」が探索者としてどのように変化していく自己のストーリーを描くのかを明らかにしようとする。そこで「JFC」は、ドミナント・ナラティブを含む彼ら、彼女らの人生を語る様々なストーリーの狭間で、決して完結されない、途中で筋書きが変わることすらある未完の物語を獲得するようになる。と同時に、そこでは、「JFC」のストーリーを記述するフィールドワーカーも変化するストーリーの局外者ではありえない。本論文は、フィールドワーカーの主観性を問うなかで「JFC」の主観性に迫ろうとしているのである。

原氏は、長年、構造的暴力に直面する「JFC」の国籍取得を支援してきた優れた実務者でもある。その経験が本論文での探索者としての「JFC」というとらえ方を可能にしたと言えるだろうし、逆に、本論文が明らかにした狭間性にもとづく「JFC」の未完の物語は、「JFC」への支援のあり方を根底から問い直し、彼女、彼らのライフ・ストーリーに沿ったものとするだろう。この意味で、本研究は、新しい時代の社会的要請に即した地域研究の地平を切り開く研究であると評価できる。

以上より、本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分な水準にあるものと認められる。